

でくの坊

第18期 井原 真衣

「でくの坊」は、ここ数年の間、私が最も愛聴しているロックバンド、The Cheserasera の曲の中でも、とりわけ私が好きな曲のタイトルです。「でくの坊」とは、皆様もご存知のとおり、役立たずの者を指す言葉です。「木偶（でく）」、すなわち木彫りの操り人形は、人に操られるだけで、自分ひとりでは何もできないということが、「でくの坊」という言葉の由来とされています。そんな言葉を卒業エッセイのタイトルに掲げるなんて、なんとネガティブなゼミ生なのだろう、と思われたかもしれません。ですが、私にとってこの言葉は、ただネガティブであるだけの言葉ではなく、どこかにポジティブな意味を持ちうる言葉であるようにも思えます。どうということかを説明するために、まず初めに、冒頭において言及した曲について、簡単にご紹介します。この曲は、「でく」という主人公が、ダメな人間であるはずの自分にも沢山の愛情を贈ってくれる周囲の人達に対して、恩を仇で返すような生き方しかできない自身の未熟さを嘆きながらも、どこかで変わりたいと願い、もがき続けるさまを描いた物語として進んでいきます。その物語を通して、周囲の人達への感謝を胸に、不器用なりに精一杯生きようとする人間の愛おしさのようなものを、私に感じさせてくれました。したがって私は、「でくの坊」という言葉には、自分ひとりでは何もできないとしても、むしろ、そうであるからこそ、周囲の人達から与えられる愛情や支えの大きさを痛感することができ、それゆえに、周囲の人達への感謝を忘れず、少しずつでも前進をしようとする人の姿を見出すことができるのではないかと考えています。

そして、私には、このような「でくの坊」が他人には思えず、その姿を、自分自身に重ねてなくなってしまうのです。私は、呑気で世間知らずの人間ですが、周囲の人達にだけは恵まれて、そのおかげでここまで生きてこられたように思います。とりわけ、小野ゼミでの2年間においては、そんなことを強く感じられました。例えばグループワーク中、情報処理の遅さゆえに議論を途中で止めるような発言をしたり、論文の原稿の添削をお願いした際に、抜けの多さゆえに余計な手間を掛けさせてしまったりと、特に同期や小野先生には、度々ご迷惑をお掛けしてしまいました。

ただ、私は、このエッセイにおいて自分がいかにダメな人間であるかを語りたいわけではありません。私がお伝えしたいのは、こんな私でも、頑張れたな、と誇らしく思える活動の成果や、懐かしいな、と思いつける様々な思い出を胸に、無事卒業を迎えることができることへの幸せな気持ちと、こうして私が2年間の活動を完遂する上で、間違いなく、なくてはならない存在であったと言える、私を支えてくださった方々への、尽きることのない感謝の思いです。

まず、同期のみんなとは、この2年間、他のどのコミュニティの人達よりも多くの時間を共有してきました。自分には無いものを沢山持っているみんなの姿を見て、自分の不甲斐なさや焦燥感に苛まれることもありました。ですが、それ以上に、どのような状況にあっても仲間への心配りを忘れない優しさや歩み寄りの姿勢を持ったみんな（とりわけ、ゼミ長である芝田朱莉さん）に、自分の悩みを誰かにオープンに

話すことがあまり得意ではない私は、実は度々救われてきました。本当にありがとう。また、広報やゼミといった同じ就職の仕事を担当者同士であった都竹卓哉君とは、作業を共にする時間が長かったということに加えて、彼の思い出話が好きな性格ゆえに何かと過去を振り返る機会が多かったということもあり、今でも様々なエピソードを鮮明に思い返すことができます。そのすべてが楽しいものであったわけではありませんが、未熟者の私のことをいつも誰よりも気にかけて、応援してくれていたことや、有志のビジコンへの参加など、様々な活動に共に挑戦する仲間であり続けてくれたこと、ひたすらに感謝でいっぱいです。

また、第17期生OB・OGの先輩方は、私が小野ゼミ入会以前に知っていた先輩後輩関係以上の深い関係を、私たち第18期生との間に築いてくださいました。先輩方が私たちに与えてくださったものの大きさは、測り知れません。とりわけ森直也さんは、ゼミ入会前のエントリーシートの添削から、ゼミで取り組む最後のコンテンツであり2年間の集大成とも言える卒論執筆活動に至るまで、最もお世話になった先輩です。頼ってしまっただけでしたが、いつも親身になって対応してくださり、本当にありがとうございました。また、江崎舞香さん・古橋実咲さんには、先輩方が小野ゼミ現役生であった昨年度のゼミ活動において沢山お世話になったことは勿論のこと、今後は、会社という新たな環境においてもお二人の後輩でいられることを、とても嬉しく思っています。これからもどうぞよろしくお祈りします。

次に、第19期生の後輩のみんな。きっと不甲斐ない先輩であったであろう私のことも、様々な場面で頼ってくれてありがとう。マケ論発表などの準備期間中、私が夜行性だったからか、眠い目を擦りながら奮闘するみんなと一緒に作業する時間が、同期の中でも特に多かったような気がします。体力的に辛い深夜の時間でさえ、いつも思いやりやユーモアで溢れていたみんななら、これからの就職活動も、4年生としてのゼミ活動も、力を合わせて乗り越えられるのではないかなと思っています。応援しています。

そして、小野先生には、抜けが多く無計画で、時には無謀とも思われる挑戦をしようとした私のことも、常に温かく見守っていただき、多大なお力添えを賜りました。特に、卒業論文と、それを元にして学会賞や雑誌に投稿した論文の執筆に関しては、お忙しい中無茶なご相談やお願いにも応じてくださり、本当にありがとうございました。その過程において、自分の欠点の深刻さに改めて気付く機会をいただいたと同時に、途中で諦めず、最後まで努力し続ける道を選ばせていただけたことに、心から感謝しております。

ここまで、気付けば幾分か長めの尺をとって感謝の言葉を書き記させていただきましたが、今、改めて思うことは、お世話になった皆様に対して、決して恩を仇で返すような人間で終わるようなことなどなく、卒業後も、少しずつであれ成長を重ね、小野ゼミ生としての誇りを持って胸を張っていられる人間であれるよう、精一杯生きたいということです。

最後になりますが、(何を考えているか分からないと言われがちなの私のことですので、このような場をお借りしてお伝えしない限り、なかなか伝わらないことであるかもしれませんが)「でくの坊」のような私に、沢山の素敵な時間や人との出会いを与えてくれた、温かさで溢れる小野ゼミのことが、私はずっと、大好きです。



ある日の対面ゼミにて
(著者は1列目左から2番目)